

1月17日(火)

セカンドチャンス

聖書朗読 ヨナ 3章

神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。 II コリント 7:10

小学校の教室のドアに、次のようなメッセージが張られていました。「過ちから学ぶのであれば、過ちは『取り返しのつかないこと』では決してありません。

ヨナは、神様の命令に従わず、神から離れ行くという、大変な過ちを犯しました。ヨナの過ちは「取り返しのつかないこと」にも成り得ました。ですが、神様はヨナをお見捨てにならず、もう一度チャンスを下さいました。ですから、ヨナ3章は次のように始まります。「再びヨナに次のような主のことばがあった」。そしてヨナは、自らの過ちから学ぶことが出来たのでした。

さらに神様は、ヨナにだけ「やり直しの機会」をお与えになったのではなく、ニネベの町の人々にも同じように「やり直しの機会」をお与えになりました。ニネベの町は悪で溢れており、それゆえ神様は、この町を滅ぼされることをお考えになっていました。ところが、ヨナが神様からのメッセージをニネベの人々に伝えたところ、人々は神様を信じ、悔い改めました。「神は、彼らが悪の道から立ち返るために努力していることをご覧になった。それで、神は彼らに下すと言っておられたわざわいを思い直し、そうされなかった」(3:10)。

私達も皆、過ちを犯してしまいます。しかし、神様の赦しを求め、神にゆだねるならば、神は「セカンドチャンス」を下さいます。この神の恵みに謙虚に与るならば、私達は「過ち」から学び、少しずつでも霊的に成長することが出来るのです。

讃美歌 239

祈り 神様、「セカンドチャンス」をお与え下さり感謝致します。私たちが、過ちより学ぶことが出来るよう、お導き下さい。

イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

ジーナ・ゴードン

サウスカロライナ州ミュレルズインレット

1月18日(水)

信仰と疑い

聖書朗読 マタイ 11:2-6

だれでもわたしにつまずかない者は幸いです。 マタイ 11:6

信じてよいのか、そうではないのか……。そんな心の葛藤が、本日の聖書箇所では生き生きと描かれています。

バプテスマのヨハネは、獄中で苦しんでいました。そのような状況に置かれていたヨハネが、(主イエスを救い主として)本当に信じてよいのか、心の迷いが生じたのも無理はないでしょう。なぜ神様は、私を牢獄に入れてしまったのか。福音を宣べ伝えていた私が、なぜ不当に罰せられなければならないのか。私は、本当に真理を宣べ伝えているのだろうか。主イエスは、本当に(旧約聖書で預言された)救い主であられるのか。もしかしたら、救い主は別のお方なのでは……。そんな思いが心をよぎり、ヨハネは獄中で悩むのでした。

しかし、イエス様は、そんなヨハネを厳しく批判なさることはありませんでした。なぜなら、ヨハネは、自分の正直な思いを(包み隠すことなく)主イエスにそのまま伝えたからです。ヨハネに対する主イエスのお答えは、単純に「私こそが救い主です」というお答えではありませんでした。主イエスは、「ご自身が行っているしるし(奇跡などの業)を見て考えなさい」とおっしゃいました。「目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツアラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている」(5節)。主イエスが救い主であられるしるしが、イエス様の業に満ちているのです。

主イエスを救い主として信じ、従うということは、(ヨハネが葛藤したように)私達にとって難しく感じられる時もありましょう。主イエスは、私達に「まことのいのち」をお与えになるためにこの世界に来てくださいました。そして、主が望んでおられることは、私達が主と共に御国で永遠に生きることです。御国で私達が頂く祝福は、言葉では言い表せないほどの素晴らしい祝福です。私達は、そのような素晴らしい祝福へと招いて下さっている主イエスの招きに応答する必要があります。(ヨハネのように)私達も様々な思いを心の中に持ちますが、主の招きに対する応答を決断する必要があります。私達にはあると言えましょう。主イエス以外に、救い主はおられないからです。

聖歌 500

祈り 神様、疑い深くなる時もお導き下さい。信仰を強めて下さい。心よりあなたに従うことが出来ますように。イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

ゲリー・ハロウェイ

テネシー州ナッシュビル

1月19日 (木)

恵みとしての祝福

聖書朗読 マタイ 20:1-16

このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。

マタイ 20:16

時に私たちは、思い上がって、(悪い意味で)自分を過大評価したり自己主張したりしてしまう場合があります。例えば、「自分が受けるにふさわしいもの」以上の何かをしきりに求めてしまう時があります。或いは、買い物レジに並んでいる時や渋滞の中で運転している際に割り込む人がいると、激怒して「私が先です!」思わず怒鳴ってしまったりします。このように、私たちは「自分が第一」という態度をお互いに主張し合ってしまうのです。

本日の聖書箇所(ぶどう園の労働者のたとえ)では、ぶどう園の持ち主は、まず、早朝に労働者と1日1デナリの契約を交わし、労働者を雇いました。その後少ししてから、さらに労働者を雇いました。そしてその後、さらに労働者を雇いました。一日の労働の時間が終わり、ぶどう園の持ち主は、雇われた人々に賃金を支払いました。そして、雇われた人は皆、同じ額の賃金が支払われたのです。そこで、朝一番に雇われた人々は憤慨したのです。彼らは、「私たちこそ皆の中で一番熱心に、かつ長時間働いたのだから、賃金が誰よりも多く支払われて当然だ」と考えたからです。

私たちも、次のように考えがちではないでしょうか——「私は、長い間まじめに生きてきたのだから、それ相当の祝福が与えられて当然だ」というように考えがちではありませんか。そして、自分よりも他の人が祝福されているように感じて、憤りを感じてしまうことはありませんか。そんな時、私は(祈りを通して)神にその思いを伝えます。そして、祈りを通し神様に語り掛けると、身も心も軽くなったように感じます。なぜなら、神様の恵みと慈しみが、どんなに豊かに注がれているか、気付かされるからです。私はそんな豊かに恵みを頂くに値する人間なのでしょうか。いいえ、神様の恵みは、私がどんな人間かにかかわらず、神の側から一方的に豊かに注がれているのです。

讃美歌 271

祈り 神様、慈しみと恵みを日々与えて下さることに感謝します。お導きの中で過ごせるようお助け下さい。

イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

キャロライン・イエーツ
ノースカロライナ州ローリー

1月20日 (金)

準備万端に

聖書朗読 マタイ 24:37-41

だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。

マタイ 24:42

私がまだ低学年だった頃、私たちの家族はテキサス州シェフェルドの西へ25キロ程のアリソン・ランチという所に住んでいました。そこは、「人っ子一人いない町」という訳ではないものの、西部劇に出てくる荒野のような(へんぴな)田舎町でしたので、都会の喧騒から遠く離れ、とても静かな毎日を過ごせる所でした。

ところが、とある晴れた日のことです。その時私は屋外に居たのですが、とても大きな爆発音のような響きが鳴り渡りました。私は大変驚いて、恐怖に包まれました。そしてその音は、至る所から聞こえたように思いました。「この世の終わりが来た!まだ準備が出来ていないから、神様待って下さい!」と思わず叫んでしまいました。

結果的には、その爆音は、近くを通りかかった航空機によるものでしたが、当時私はまだ幼かったので、最初は世の終わりかと思ってしまったのです。しかしながら、御言葉によれば、主が再び来られる時、多くの人が驚き慌てることとなります。私が幼かった時に勘違いして驚き恐れたのとどこか似ているかもしれません。主の再臨への備えが出来ていないと、「準備が出来ていないから、神様待って下さい!」と叫ぶしかないのです。ですから私たちは、いつ主が再び来られても良いように、準備を整えておく必要があるのです。

私たちが、主の再臨がいつあっても良いように心の備えをしておくことが出来ますように。霊的に整えられて、祈りをもって主の再臨を待ち望むことが出来ますように。準備ができている人にとっては、再臨は待ちに待った救いの日となるのです。

讃美歌 171

祈り 神様、あなたがお戻りの際喜んであなたをお迎え出来るよう、私たちが準備出来るようお導き下さい。

イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

クリス・フリッツエル
テキサス州グランブリー

1月21日(土)

いつものように

聖書朗読 マタイ 26:36-46

誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。 マタイ 26:41

イエス様は、「いつものように」(ルカ 22:39) オリーブ山へ行かれました。イエス様は、しばしば夕べのひと時を、町の外で過ごされたようです。それは、群衆たちから離れて、お一人で父なる神様との祈りの時間を過ごされるためでした。本日の聖書箇所でも、イエス様は確かに「いつものように」(ルカ 22:39) オリーブ山へ行かれたのですが、この夜は十字架におかかりになる前の夜であり、イエス様にとって特別な夜でもありました。

神様の御子であるイエス様は、「心は燃えていても、肉体は弱い」ということを、良くご存知でした。イエス様は、十字架という受難を前にして、父なる神様によるお力添えが必要であることを良く理解しておられました。ですから、いつものように、熱心に祈られたのです。なお、その時、ペテロ、ヤコブ、ヨハネたちは、「肉体の弱さ」ゆえに、(祈り続けることが出来ずに) 眠ってしまいました。彼らは後に、主イエスの熱心な祈りを思い起こし、祈りの大切さを学んだことでしょう。

イエス様が祈りを「いつものこと」として、普段の生活の中で大切にされたように、私たちも、祈りを生活の中で「いつものこと」として大切にしたいものです。イエス様が祈りを通して父なる神様から力を頂いたように、私たちも祈りを通して、神様からの支えを頂くことが出来ます。主イエスから学び、神様を求めることを優先して、日々歩んで参りましょう。

讃美歌 310

祈り 神様、(イエス様が言われたように) 心は燃えていても、肉体は弱いものです。イエス様という、素晴らしいお手本を与えて下さったことに感謝します。私たちも、祈りを通して力付けられ、神様のみこころを求めて歩むことが出来ますよう、お導き下さい。

イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

匿名
テネシー州ナッシュビル

1月22日(日)

従兄弟

聖書朗読 マルコ 1:1-8

預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ。わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を整えさせよう。荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』」 マルコ 1:2-3

私の母方の家族は大家族でした。子供がたくさんおり、さらに孫、従兄妹もたくさんいました。私たちは、彼らととても良い親戚付き合いをすることが出来、あらゆる意味で、彼らと親しく過ごすことが出来ました。祝い事があるとパーティーを開いたり、結婚式やその他の機会にもよく集まっていました。みんなで集まり、共に過ごした時間はとても素晴らしい時間でした。

ところで、本日の聖書箇所は、マルコの福音書に描かれているバプテスマのヨハネに関する箇所です。皆さんは、「ヨハネはイエス様の従兄弟だった」ということを覚えておられますでしょうか。ヨハネは、どこからともなく、救い主イエス様の道を備えにやって来たのではなく、(地上の人間関係においては) 主イエスの従弟でした。ヨハネは、イエス様が救い主だと確信し、救い主のための道を備える働きをしたのです。主イエスとヨハネが従妹同士として育っていく様子は、残念ながら聖書には記録がありません。ですが、大切なこととして聖書が伝えていることは、ヨハネは主に会い、主との交わりを通して変えられ、主を愛し、主のために道を備えるという奉仕をした、ということです。ヨハネは(従弟でもある) 主イエスを救い主として受け入れ、救い主の到来を人々に伝えました。ヨハネにとってイエス様は従弟ではありましたが、イエス様を救い主として人々に伝えることを、ヨハネは喜んでしたのです。私たちも、救い主イエス・キリストを、ためらうことなく周りの人々にお伝えしたいものです。

讃美歌 121

祈り 神様、私たちの贖ないのためにイエス様をお送り頂きありがとうございます。

イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

シェリー・リームス
テキサス州ラボック